

創造劇場

第  回

試 演

昭和15年5月
27・28・29日
夕5時飛行館

院本劇 太功記 十冊目 鴻池幸武 演出

他軍同同講眞初操武武母	大勢	中久	一吉	二菊	三前	四市	五阪	六市	七川	八東	九市	十谷	十一大	十二大	十三大	十四大	十五大	十六大	十七大	十八大	十九大	二十大	お効照指演	嘶	子果明導出
尾中大大中大大市阪市大大	上村谷村谷川東川谷谷	多門友女彌か廣廣	賀竹七美太し太五	昇彌郎丸藏郎助は郎郎	柏吉松大	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	中武	
尾中大大中大大市阪市大大	上村谷村谷川東川谷谷	多門友女彌か廣廣	賀竹七美太し太五	昇彌郎丸藏郎助は郎郎	伊田崎	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	
尾中大大中大大市阪市大大	上村谷村谷川東川谷谷	多門友女彌か廣廣	賀竹七美太し太五	昇彌郎丸藏郎助は郎郎	伊田崎	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	友右衛門	

▲配役▼

【解説】
尾田春永は諸侯を従へ安土城に眞柴久吉、武智光秀を初め諸士を従へてゐます。時に捕へ置いた普天坊を呼び出し、これを鹿ふ光秀に構はず、泉州堺の妙國寺の蘇鉄にかこつけて置ると、怖へ切れず普天坊は『佛罰思ひ知れ』と怒りながら題目を唱へます。(安土城の段)。その後天正十年六月一日、春永の嫡子春忠は二條城に居なれしめ勅使を迎へ奉る日の餐座の役人は光秀と蘭丸にて、多人が膳部の事争ふ折柄、春永出て光秀の餐座を法外と、蘭丸に鐵扇で光秀の眉間を打たせす。光秀と全席の一子十次郎は恨を吞んで館へ歸ります。(二條城中配膳の段)。千本通の館へ歸つた光秀は遂に謀叛を決心し、諫める舊臣豊後守を伐り首途をします(光秀館の段)。そして翌二日遂に春永は本能寺にて光秀の焼討のため自害して果てました。(本能寺の段)。かくして兵を起した光秀は妙心寺に岩を構へましたが、母の皇月は悍光秀の非道を歎き一間の中に黙々としてゐる折から歸つた光秀を出迎へ、心穢れた悍には同座するも恐れ有りと雲水に出て行きます。光秀の妻操や嫁初菊などが止めるのを、光秀は家來に母の行先を見届けにやります。母を見送つた光秀は操や十次郎、初菊を遠ざけ、唐紙に辞世の一句を認め自害せんとするを、様子を見守つてゐた十次郎と四方天が走り出、光秀の粗忽を諫める、光秀は再び心を識し、綱旨を受けて諸國を平げんと大紋烏帽子姿にて悠々大内山へ急ぎます(妙心寺の段)。

これから今度上演される『尼ヶ崎』の段になり母を手にかけて、中から馳戻つた久吉との山崎の一戦は筒井順慶の裏切りのため破れた光秀は、漸く逃れた小栗栖の藪蔭近くで竹槍に突かれ無惨の死を遂げます。



油醬ンマーゴッキ

社會式株油醬田野 達用御省内

院本劇「太功記十冊目」に就き

鴻池幸武

この度、創造劇場で『繪本太功記』十冊目を院本劇として上演することになりましたにつき一言申述べます。總て義太夫物は申すまでもなく、その書卸しは人形淨瑠璃芝居に於て、従つて藝の基礎はその時に出来上つてゐるのであります。それを義太夫道では「風」といつて居ります。即ち院本作者が書いたテキストの作意を汲んで、これに作曲を施し、初演した太夫、三味線彈の藝術で、その戯曲の藝術的骨子として今なほ嚴存して居り、斯道の修業の目標となつてゐるもので、その曲の足取、息などの口傳となつてゐるものであります。つまり、正しい義太夫節はその劇の演出になるのであります。

この度の『太十』は、その運びを出来るだけ正しい義太夫節に則つて、ほんとうの義太夫劇の上演を試みる積りであります。因みに『繪本太功記』は、寛政十一年七月大阪道頓堀若太夫芝居に書卸された淨瑠璃で、作者は近松村、近松湖水軒、近松千葉軒で草双紙の『繪本太開記』に據つたものと思はれます。太功記物の淨瑠璃中最も世に知られたもので、全十三冊の仕組に出来て居り、發端は「安土城」で尾田春永と普天坊の條。一冊目は「二條城中配膳」で、春永が光秀を鉄扇で毆打する條と。千本通の「光秀館」で光秀が反逆の意を決する條。二冊目は「本能寺」にての春永の酒宴と蘭丸と志のぶの色模様光秀の焼打で序切になつてゐます。三冊目は「中國陣所」の口で、清水宗治の高松城が久吉の水攻めに苦しむ中、浦邊山三郎と玉露の條。四冊目は全じく中で「小梅川隆景軍配」の條。五冊目は同切で、「局註進」と「清水宗治切腹」の條で二段目の切場になつてゐます。六冊目は光秀の「妙心寺誓」でいよく、繪旨を拜さんと大内山への出達の條。七冊目は足利慶覺の「杉の森誓」にて鈴木孫市切腹の條で、三段目切場。八冊目は春永の法會。九冊目は「瓜獻上」で四方天田鳥守の最後。十冊目がこの度上演の「尼ヶ崎皇月閑居」で全冊中最も有名で且優れた場であります。初演は初代豊竹麗太夫で、鍋屋宗左工門といふ素人が初出座の時であります。十一冊目は光秀の臣松田太郎左工門の妻柳が光秀の一子音壽丸を伴つて山崎の利休を訪ねる途で、十二冊目は利休の住居。十三日目は小栗栖の光秀の最後で大團圓になつて居ります。

演	梅本重信
装	伊藤藤一
舞	小幡弘三
照	松崎國雄
効	吉田貢
台	
監	
置	
出	

△配役▽

クリスト信者の老婆……………小百合葉子
 牛を連れた老爺……………大谷友三
 息子……………大谷廣太郎
 孫娘……………田上嘉子

クリスト教の婆さんが、今日も朝早くから馬に草をやる爲めに來てゐる。彼女は死んだ配遇への供養の爲めに、毎朝こうして此の田舎道の木株に腰かけて、そこを通る馬の爲に新鮮な草を與へてゐるのだ。

そこへ彼女と昔戀仲であつた爺さんが、牛を連れてやつて來る

兩人は自然昔の憶ひ話に戻つて行く。折を見て婆さんは「爺さんに聞いて貰ひたい話がある」と切出す。
 と云ふのはその昔兩人が戀仲であつたやうに、今は爺さんの末の息子と、婆さんの孫娘とが、仲よしになつてゐるさ云ふのだ。
 爺さんは、うちの息子に限つてそんな事はないと云つて信じない。婆さんは、もう一月も前からわたしの家を、まるで自分の家のやうに心得て泊りに來てゐるのだから、一緒にしてやつてくれと頼む。

そこへ、その証據と云はん許りに、若い二人が手を繋ぎ合つてやつて來る。爺さんは親の体面上、嚴として叱らなければならぬが、婆さんが事々につけて吹出すので爺さんは思ふやうに叱れない。又若い二人も、寧ろあどけない位にけりりさしてゐる。やがて、一應吐つた上で二人を別々の道に歸し、老爺と老婆が残つて婚禮の日取りを決めやうとする。見るさ若い二人は、別々の道な歸り乍ら、街道と畔道とでいつまでも手を振り合つてゐる爺さんも婆さんも目を細めて、可愛くて仕様がなないと云ふやうに「本真に仕様のない二人ぢや」「仕様のない二人ぢや」と云ふのである。

牛が鳴いて、人々は朝の仕事如初める時間である。

坂中正夫作 田舎道 梅本重信 演出

廣太郎君

梅本重信

初めて廣太郎君に會つた時、それ迄漠然と考へてゐた歌舞伎の役者さんと、あまりに彼が違つてゐるので一寸驚かされた。丸坊主の頭、にこ／＼した顔、普通の背廣、學生のやうなオーバー。それに一寸硬くなつて、『は』『は』と云ふ返事。一口に云へば役者さんらしくないのである。後でお父さんから聞いた話だが、歌舞伎の總ざらひには、みんなお召の紋付を着て出るのが、廣太郎君はそんな時にでも、樂屋までは普段の背廣で入り、樂屋で紋付に着替へて稽古場に出ると云ふ事だ。又、家では紺緋を着てゐると云ふ。そんな話の似合ふやうに彼は生眞面で、几帳面だ。台本でも性急な思はれる程、早くプリントして、半紙の表紙が傷まないやうに本挟みで挟み、大切に抱えて歩いてゐる。田舎道でも、少ない台詞を毎日いろんな風に云つてみる。小さい役は小さい役として、あつさり考へておきなさいと云つても、彼にはそれで承知出来ないらしい。そして自分の出場は少いのに、初めから終りまで稽古に立會ふ。それは何でもない事のやうであるが、何でもない事が中々やれないものだ。そして僕らのどんな話でも、注意深く耳を傾けてゐる。僕らは時々一言半句も聞き洩らすまびとしてゐる彼の眼差にぶつかつて、思はず責任の重大さが、背筋を走る時がある。又時には僕は、自分の傍に、吸取紙が姿見のやうに立つてゐるやうな氣がする時がある。彼は一週の中、一日は聲樂の稽古に何日かは習字、漢文、英語の稽古に、又何回かは日本舞踊、義太夫節の稽古に通つてゐると云ふ。そして夜は歌舞伎の舞台に立つてゐる。今はそれらの稽古を休んでゐる代り、毎日午前十一時から午後六時頃まで、殆んど食事する時間もなく、井物を頬ばり、辨當をつゝいて稽古、稽古、稽古である。僕は長年新劇畑にゐて、新劇の研究生達が、初めは純粹な熱情を持つてゐても、それが次第に生活の爲めに轉向し、或は熱情を失つて消えゆくもの、或は映畫の方へ引抜かれて、兎角實らない勉強會の徒勞さを嘆いてゐるが、廣太郎君を見てゐると、此處にこんないゝ人があるぢやないかと思ふ。彼は芝居以外のものに出てゆく事もないだらうし、生活の爲めに轉向する事もあるまい、僕は稽古にしみじみ張合を感じる。どうか廣太郎君のよき才能が、よき人柄と相俟つて、今後益々素直に伸びびと大らかに、成長して行くやう、僕は願つてゐる。

演	久里原一登
装	吉田謙吉
舞	阿部廣次
臺	堀内敬三
監	松崎國臣
照	吉田貢
効	

◆ 配 役 ◆

アルギメネス王	大谷廣太郎
ザア	平澤鴻太郎
老奴	中村七丸
ダルニアツク王	大谷門二
監督	大谷武藏
豫言者	尾上多賀
偶像の衛兵	大谷友三
王の犬の僕	小波ユリ
妃オサリヤ	岩村英子
妃オクザラ	田上嘉子
妃カワアラ	岩村英子
妃ストラゴリンド	岩村英子
其の他王の従者、奴隷等	廣五郎、友美藏、女太郎、彌之助、雲之助、なてしこ、久雄、光太郎、友壽

『アルギメネス王』原名 (King Argimenes and the un Known Warrior) は一九一一年ダブリンのアメイ劇場で上演發表され、ダンスニイの、『光の門』につぐ初期の作品である。ダンスニイはアイルランドの名門、ダンスニイ家十八代目の男爵であるが、名家の出身らしい氣品と風託のない自在な構想に充ちた戯曲や短篇を數多く書いてゐる。

『アルギメネス王』は場所も時も漠然とした(時は大むかしとなつてゐる)ダンスニイの特徴である現實を超越した奔放な獨創の世界である。そしてこの豊富な詩人の意匠の中には、きらりと鋭い皮肉が刺してゐる。

アルギメネスはダルニアツク王に敗れ、骨をしゃぶつてその日を送る奴隷となつてゐるが、或日作業場で古い刀を見出す。そして、その刀の導で偶像イルリエルを倒し、ダルニアツク王を追ひ王位を恢復する。しかし奴隷の生活に馴染んだ彼は、うっかり死んだ犬の骨を食はらうとし、慌て、口をおさへたりするのであつた

第一幕 城外にある奴隷の作業場
第二幕 ダルニアツク王のイルリエルの間

ダンスニイ作 アルギメネス王 久里原一登 演出
松村みね子 譯

◎ 去年の十月、軍人會館ではじめて廣太郎君や新成座の人達と一緒に仕事をした。歌舞伎の人達はごく少數を除いて懶者が多いと聞かされてゐたので嘗てかゝつたのだが、意外にこの人達が眞剣であり、演劇に對しても眞面目な心構へを持つてゐるのに驚かされ、自分の輕卒な判断を愧ぢた。この仕事を棟に廣太郎君の人柄にも親しみを覚え、いつのまにか私達はさゝやかな研究会を持つようにさへなつた。幼時、地方で過したため幸にして廣太郎君の子役時代のことを私は知らない。随つて周圍から彼の少年の頃の出色な役ぶりを聞かされても、興味もなければ感動もしない。それらは私の知つたことではない。廣太郎君を演技者として評するならば、子役以後の、更に言へば創造劇場から誕生する彼が對照とならねばならないのである。廣太郎君の決意もそこにあることを知つてゐる。

◎ 小さい頃、毎朝聲高らかに本を讀まされたことが思出される。幼年朗讀の圖は懐しい風俗の一つであるが、たとふれば創造劇場もそのようなものであらう。將來は知らず、現在の出發期は幼童の卒直さで演劇に讀み浸つてゆく勉強のための劇團である。現在の演劇に對して歌舞伎系の若人が反逆するとか追従するとか、さうしたことを旗印としてゐるのではない。今後、時として現れるものが客觀的にはどう映らうとも、それは演劇への熱情から來る体當りの所産以外のなものでもない。勉強のためであるからには、又傍若無人な演目が掲げられることがあるかも知れない。廣太郎君も、今のお客さんの嫌な芝居をやつてみたいと言つてゐる。それもこの劇團に於ては許されていゝだらう。通りすがりの窓に懸命な朗讀の聲を聞き、人あつて微笑をもつて耳を傾けていたゞければこの劇團の大きな力づけとなるにちがひないのである。

◎ 殆ど全部の人が翻譯劇にはじめてあつてゐる。ものによりけりだがこの「アルギメネス王」は第一段階としてお互に、勉強になつたと思つてゐる。歌舞伎の人特有の發聲・せりふ廻しのいけない點を除くことに力をそゝいだ、布石第一の慎重さを期するために毛利菊枝氏のご出馬を願つたりした。堀内敬三先生が錢に作曲を下さつた。鈴木英輔先生が劇團成立から今日までなにかと配慮して下さつた。

『創造劇場』に

鈴木英輔

廣太郎君が何か新しい仕事をやりたいがどういふ風に勉強を始めたらよからうといふ相談をもつて久里原一登君と來られた時、正直に云つて私はびつくりした。まだ子役時代の印象がさまで薄らがないのであるから、しかもよそ目には所謂御曹子の無氣力なおつとりと行ひすましたやうな少年として私には映じて來てゐたのであるから、この人がこんなことを考へてゐるやうとは夢にも思へなかつたのは當然であらう。

だが段々話をして見ると、何よりも私は廣太郎君の質實な人柄にうたれた。思ひ上りや我がまゝや浮つ調子な所の微塵もない、きちんとしてしかも眞面目にどうか堅固な所のある廣太郎君、それは實際あまりにも役者らしくなく、書生といふよりも昔の學僕のやうな感じさへ私には考へられたのである。激しい調子では云はないけれど、さまざまの困難にたえても、自分の信念を貫かうといふ強さも熱情も、年甚だ若いにもかゝはらず、言葉の端々にうかがはれた。

一体、今の若い歌舞伎俳優程不思議な生活環境をもつてゐる者はない。そして又誰もがこの生活に慣れそこに安住してゐる。ましてや演劇といふものに、舞台といふものに、燃えるやうな憧憬や苦悶や懷疑をもつ人は稀である。生活も演劇に對する態度もあまりに安易であり、恐らく次の時代はこのやうな人々をおきざりにして進行するであらう。廣太郎君は既にして生活の態度に於いてこのやうな環境に反撥してゐるし、今又新劇行動を通じて明確な自己を主張しやうとしてゐる。

まだあまりにも弱年であるから、公演の形態を取るよりも研究室的な勉強をつけた方がいゝのではあるまいかと考へ、昨年からその實行をすゝめて來た。幸に廣太郎君の周圍には久里原一登君や梅本

重信君のやうな新進有爲のこれから劇界に何かをしようとし、又現にしてゐる志ある友人が澤山ゐるから、その指導下に半年の間勉強も大分進んだ。あまりに長いこと研究室の勉強だけをつゞけることの氣分的にも不可なることを考へ、勉強はそのまゝ續けるとして一先づ劇團を結成し公演もやりた

いといふ廣太郎君の意見により、創造劇場が出来上つたわけである。だから、創造劇場は大きな旗印みたいなものは今の所不要ではないかと考へてゐる。何でもいゝから勉強になることをやればいゝ、たゞし方向だけは間違つてはいけない、研究室の延長であるから、實驗的試験的でもかまはないし、未熟な點も御用捨を願はなければならぬ、日本演劇壇によびかけるといふよりも廣太郎君及びその周圍の人達のすこしづつの成長を好意をもつて見守つてゐたいといふより他はないと私は考へてゐる。

全体として歌舞伎を否定するといふ態度でなく歌舞伎の現代的適應といふことを考へるのが、このやうな歌舞伎の若い俳優の命題となるのであらうが、それは歌舞伎脚本をやるといふことではなくて、歌舞伎のもついろ／＼のエスプリやテクニクを如何に現代演劇として昇華させるかにかかつてゐて、それは長い年月の實驗を通じてやうやくなされることであらう。創造劇場の使命といふやうなものが、もしありとすれば、それは實にこの点での一種の捨て石となることだと思ふ。それには十年も二十年もかかる。廣太郎君も又この仕事を内外から見守つてくれてゐる人達もそれだけの根氣と忍耐とが絶対に必要だ、と私はこの言葉を改めて創造劇場の首途に贈りたい。

風に鳴る若竹よ

山 岸 荷 葉

名付けて創造劇場といふ。それは大谷廣太郎を中心にして、新に創造せられた劇團である。廣太郎は梨園の名門、大谷友右衛門の愛兒で、今年適齡、大に春秋に富む青年である事は、先さま御承知である。

創造劇場、是も亦言ふまでもなく、眞面目に劇を研究する、むしろ小規模であつて、奥底は非常に深い、質素、着實な組織になつた劇團であつて、私は其芽生から耳にしてゐた事であるから一層の期待と興味とを以つて歓迎するものである。

『繪本太功記』尼ヶ崎閑居が出来る。

嗤ふものは言ふ。やあ、歌舞伎座を向ふへ廻して、えらい意氣組だなど。言ふなこれ、そんな淺薄なものではない。この劇團が『十段目』の研究は現に前々年來であつて、智識の人、舞臺の人、絃樂の人、其他名手名人に就て指導を受け、辛苦心勞の結晶がこの實現になつたので、ゆめ／＼チヨロツカな計畫ではないのである。

『君は、何の役を演じる？』
廣太郎は一寸顔を赤くして、
『光秀を演ります。』
『光秀？』

と言つた私を、彼は更に見瞳つてから、笑つて、頭を掻いた。
『R先生が、どうぞ君が演るのは、初役ばかりなのだから、一番中心人物の光秀から研究して、遣つて行くべきだと仰言ひましたから。』

無論さうあるべき事だと私も頷いた、向ふへ廻すのではない、歌舞伎座に大先輩松本幸四郎丈が演じてゐるのは、むしろ活きた

手本として、彼は初日から樂まで見通したであらう。それは又言ふまでもない事。
昔て市川八百蔵が、先代中車翁から手を持つて教へられ、その實演をも見たが、豪放にして、威嚴ある歌舞伎型の、立派な光秀であつた。廣太郎は更に／＼、縦横十文字に此淨曲を研究し、劇團の人亦熱意、誠心を以て舞臺に立つのであるから、觀る人亦、廣太郎等同人の將來を懷うて、決して、疎略にすべきものではないと思ふ。

それに就て、ある人は言ふ。
『俳優の不斷は、とほけてゐなくちやいけないよ。』
其人の言ふ『とほけ』てとは、君子の如く装へ、心を締め、素養は充分に内に藏めて、而かも、何ものをも知らぬかの如くあるべきものだと言ふ事である。

廣太郎は未來多き青年である。私の氣遣ふ所は、性來の才氣が其趣味と合致して、智識的に進み、あまり『利巧』ならんとしてゐる傾がある。私はある時、『さほけ』てゐなくては、と、クオーテーションを以て戒めた事がある。

あ、俳優は、宜しく『とほけ』てあれ。その蘊蓄は、心のドン底に措いて、お金の勘定も知らぬといふほどになるこそ、將來名をなす人となるものではないか。

夏なほ寒い木曾の御嶽山の麓で、義仲旗揚の八幡社がある。今や、廣太郎は飛行箱を八幡社として、その劇團の旗揚を此所に行ふのである。美事なり、壯舉なり。私は欣んで茲に其公演を觀、更に遠大なる將來の成功を祝福する一人である。

熱と血とに湧き立ちかへる其藝を眞意に迎へて懼しくこそ見
若竹や末頼もしく風に鳴る

創造劇場

代表 大谷廣太郎
 主事 久里原一登
 文藝部 梅本重信
 同 草野悟郎
 同 鳩池幸武
 同 武智鐵二
 經營 吉田勇夫
 顧問 鈴木英輔
 同 大谷友右衛門

第一回試演劇場擔當

大道具 吉野大道具
 小道具 藤波與兵衛
 衣裳 三越衣裳部
 矢澤久太郎
 かつら みどり屋
 鴨治寅男

新成座第七回公演

昭和十五年六月三十日

築地小劇場

市川 かしは
 市川 女太郎
 市川 升丸
 尾上 多賀昇
 尾上 笹次郎
 澤村高彌改メ
 尾上 笹之助
 中村 竹彌
 中村 時代
 中村 七丸
 大谷 友三
 大谷 友江
 澤村 十次郎
 落征中
 市川 小瓢
 阪東 調太郎
 石橋 寅藏
 齋田 金藏



実西割烹

松屋

出井

電話一〇一三二番
 一四九四番



横濱名物

山侍

まぐろ

壽司

横濱オデオン座前
 電話長者町二一五九



料理

天婦ら
壽し

上野公園前

甲子亭

愛下谷九九六



即席

割烹

季節

料理

千成

新橋二丁目

千成鮎本店

電話銀座(57)

二九〇七
二九〇八
二九〇九
二九一〇
二九一一

東橋河畔
(旧大根河畔)
愛下の二三五

特に

喫茶

果汁飲料

アイスクリーム

シヤベツト

人形町住吉新道

味の店 一富士

電話芝場(66)六五二五番

気流

関西小鉢

物

電話

(57) 丸の内

銀座

銀座龜ヶ横町
六丁目八

銀座西

繪本大功記尼ヶ崎の場上演に際して

鴻池幸武
武智鐵二

今回の『尼ヶ崎』には、従來の歌舞伎劇の約束を無視した点があります。これは總て演出者の『尼ヶ崎に』對する解釋から出たものです。それらの点に關して今後生ずべき誤解を防止するため、豫め、お斷り申しておきます。

昭和十五年五月二十四日印刷
昭和十五年五月二十七日發行

東京市杉並區高圓寺七ノ九二九ホープアパート
發行者 栗原一登

印刷人 眞野議一郎
電話淺草(84) 八八二二番

印刷所 眞野印刷所
東京市淺草區馬道一丁目十六番地
電話淺草(84) 八八二二番

發行所 創造劇場事務所
東京市下谷區御徒町二丁目五十九番地
電話下谷(83) 五六八五番(大谷方)

貸

席

演藝會
集會
取引
その他
御會合
所に

朝日俱樂部

京橋區木挽町
電話京橋(56) 四四二七番

さざなみ軍記

原作 井伏鱒二
脚色 梅本重信
演出 鈴木英輔
裝置 伊藤壽一

創造劇場第二回・大劇場に於て十一月下旬公演

日本橋河出書房版

